

非漢字圏日本語学習者書字による平仮名の特徴

— 概形・筆脈を中心に —

林 朝 子*

Patterns of Hiragana Written by the Learners of Japanese from Non-Kanji Backgrounds

— Focused on rough shape and ‘hitsumyaku’ —

Asako HAYASHI

要 旨

本稿では、ドイツの非漢字圏日本語学習者を対象に収集したデータを分析し、考察を行った結果を報告する。日本語の漢字仮名交じり文において多くの割合を占める平仮名であるが、日本語教育での指導は入門期の短期間に留まっており、その後の字形の乱れが大きい文字である。今回は学習者 19 名のアンケート内容と平仮名データを概形と筆脈に焦点を当て、学習者書字の実態と課題について明らかにする。

キーワード：平仮名、非漢字圏、概形、筆脈

1. はじめに

3 種類の文字からなる日本語の表記は非常に複雑であり、日本語学習者の学習上の負担が大きく、書字する際にも文字のそれぞれの形の特徴を捉えることが要求される。表音文字である平仮名と片仮名、表意文字である漢字により表される漢字仮名交じり文が日本語の特徴であり、その中でも平仮名の占める割合はおよそ 70% である¹⁾。このように平仮名は日本語文字の特徴といえるが、学習者が平仮名学習にかけられる時間は最低 20 時間程度²⁾であり、導入時には文字カード等を使用し、形と読みの定着を図ることに留まることが多く、形を押さえて書く行為については、宿題等の個人課題として出されることがほとんどである。漢字学習に関しては、最終的に 2,000 字程度³⁾を覚えるため、長期的に文字指導の時間がとられている。しかし、平仮名に関しては初級の入門期に取り上げられる程度であり、その後に改めて学習者が自身の平仮名書字を顧みる機会にはほばないであろう。

また、昨今の IT 機器使用増加に伴い、日本語学習においても「文字を読む」ことに重点が置かれる傾向にあり⁴⁾、書字に特化した指導が行われることは非常に少ない。日本語学習者の日本語能力測定を目的とした日本語能力試験においても、漢字の読みや漢字語彙を選択する問題は設定されているが、書字については評

価対象とされておらず、日本語教育においても、学習者自身においても、書字に対する意識は希薄であると言えよう。しかし、「文字を書く」ことによって相手に何らかの情報を伝達することは日常的に行われており、学習者も文字を書く必要がある場面に出くわしているはずであり、書字に対して意識を向けることは今後も必要であろう。先述したように、平仮名は日本語の漢字仮名交じり文において 7 割程度を占めることから、平仮名の文字によって読み手が受ける印象はかなり左右されるはずである。この視点に立ち、本稿では、非漢字圏学習者の平仮名に着目し、形の特徴を明らかにすることを目的とする。漢字圏である中国語を母語文字とする学習者に関する調査は、浅田 (2006)、川上 (2009) 等で実施されておいるが、非漢字圏に特化した平仮名の字形調査は感覚的なレベルに留まっているのが現状であるため、本稿では非漢字圏学習者を対象に取り上げた。今回は、非漢字圏の中でもドイツで学ぶ日本語中級レベルの学習者を対象に、平仮名の特徴を見ていくこととする。

2. 現行の平仮名の指導

現在の日本語教育において、平仮名指導の重要性は、平仮名を早期に定着させることにより、その後の学習が進めやすいという、平仮名習得と日本語学習の定着

* 三重大大学教育学部

や学習意欲に焦点をあてたものが大部分を占める。中村（2009）でも、文字の習得が充分でない場合、学習意欲を失うことにつながると指摘している⁵⁾。平仮名定着の中には、当然「書ける」ことも含まれているが、形にまで意識を向けさせる指導や教材が十分にあるとは言えない⁶⁾。

本稿で学習者の平仮名字形の問題点を明らかにすることで、現行の平仮名指導の改善へも寄与できるはずである。

3. 調査概要と対象データ

ドイツの大学における日本語学習者 19 名⁷⁾であり、母語はドイツ語 16 名、フランス語・ハンガリー語・リトアニア語が各 1 名であり、非漢字圏を背景とする学習者である。日本語レベルは中級である。調査は 2017 年 6 月 29 日に実施した。

文字に関するアンケートと平仮名五十音図表への記入を行った。アンケートでは、平仮名と片仮名のどちらを好むかとその理由を自由記述での回答を得、文字への意識に関する質問については 5 段階（5：とてもそう思う、4：少しそう思う、3：どちらともいえない、2：あまりそう思わない、1：そう思わない）で回答を得た。五十音図は表を作成しておき、平仮名を書き込む方式をとった。アンケートと平仮名字形にかかった時間は 30 分程度であった。調査実施前には 45 分程度の講義を担当し、平仮名の歴史について触れたが、平仮名の見本例は提示しなかった。

本研究では、ドイツの日本語学習者を対象に行ったアンケートと平仮名データを分析対象とする。

4. アンケート結果

アンケート結果を基に、学習者が平仮名や書字に対してどのように考えているのかを見ていく。

4-1. 平仮名と片仮名

「平仮名と片仮名、どちらが好きか」という質問に対する回答は、平仮名 17 名、片仮名 2 名であった。平仮名を好む理由は、大きく「やわらかさ・丸み」「きれい」「慣れ」の 3 項目に分けられた。「やわらかさ・丸み」については、「丸い形が好き／柔らかい線／角がない」といったコメントであった。「きれい」については、単に「きれい」と書いているコメントもあったが、「丸い形がきれい」「角がないからカタカナよりきれい」としているコメントもあることから、「やわらかさ・丸み」を「きれい」と感じていることが予想される。「慣れ」については、「書きやすい／読みやすい／カタカナは後から勉強したから書きにくい」といったコメントがあ

り、平仮名先習であることや日本語の中の平仮名使用率とも関連する内容であろう。また、「カタカナの形はいくつか同じ」というコメントもあった。おそらく「シ・ツ」「ソ・ン」といった形が似ている文字のことを指していると思われるが、実際に読んだり書いたりする場合に混乱している様子もうかがえる。

片仮名を好む理由としては、「簡単に読めて書ける」というコメントがあった。

平仮名を好む理由として「やわらかさ・丸み」が最も多く挙げられたが、学習者の母語文字であるアルファベットの小文字の丸みと共通していると捉えているのかどうかは、今回の調査では明らかにすることができなかった。

4-2. 概形⁸⁾についての知識と意識

平仮名を導入する際、字形を捉えやすくするために概形を図形で表し、その図形に当てはまるように理解を促す場合がある（図 1）。







平仮名	概 形	平仮名	概 形
つ・へ		ふ・ん	
ら・り		す・や	
ね・は		の・ゆ	

図 1 平仮名の概形例⁹⁾

アンケートでは、上図のような概形に関する知識を持っているのか、また概形に対して意識しているのかについての質問を設けた。

まず、概形についての知識を持っているかどうかについての結果は、「とてもそう思う」1 名、「少しそう思う」5 名、「どちらともいえない」9 名、「あまりそう思わない」3 名、「そう思わない」1 名であった。また、概形に関する意識についての結果は、「とてもそう思う」1 名、「少しそう思う」2 名、「どちらともいえない」10 名、「あまりそう思わない」5 名、「そう思わない」1 名であった。

概形についての知識は、本で読んだり、日本語教師から聞いたりしたことがあるようであるが、記憶が曖昧であり、概形そのものに対する理解も不十分であると言えるであろう。実際に、平仮名を書字する際に概形を意識したことがあるかどうかについては、10 名が「どちらともいえない」と回答しており、概形とは何か、平仮名と概形の関係もどの程度理解しているのかが把握できない解答となった。

しかし、この2つの結果より、概形についての理解や意識は十分であるとは言えないであろう。

4-3. 筆順について

平仮名は本来、源字である漢字の草書体を簡略化して成立した仮名が基盤である経緯から、平仮名の線・運筆・形の特徴として「曲線的」であり「流動的」な点が挙げられる¹⁰⁾。そのため、筆順と字形の関係は大きく、筆順が形に大きく影響するものであり、平仮名の形を整える上で筆順に沿って書くことが重視される。学習者へのアンケート結果でも、「筆順は大切だと思うか」の質問に対し、「とてもそう思う」5名、「少しそう思う」9名、「どちらともいえない」5名という回答であり、半数以上の学習者が筆順は大切であると意識をしている。しかし、実際に書字された平仮名を確認すると、筆順に沿った書字の過程において現れるべきである線から線へのつながりである筆脈を感じとれない文字が多く見られた。筆順通りに書字されているのかどうか、あるいは、筆順通りであるが筆脈という点への意識がないのか、アンケートの回答では明らかにできなかった。

5. 学習者の平仮名の特徴

実際の学習者書字による平仮名を、4. で取り上げた概形と筆脈に着目して、分析を行う。

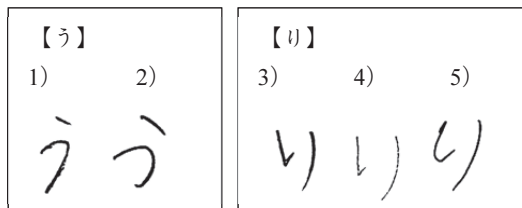
5-1. 概形からの分析

図1の6つの概形を中心に見ていく。今回は代表的な平仮名を対象に分析を行う。

5-1-1. 縦長の長方形 — 【う】【し】【り】 —

【し】については、19名全員が縦長に収められていた。【う】【り】については、以下のように概形に収まらないものが見られた。

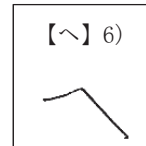
【う】については、1)のように概形が斜めの長方形となるものや、2)のように1画目が右に寄りすぎている形のものが見られた。【り】では、1画目と2画目が離れてしまっており、縦長のイメージが捉えにくく、3)のように逆三角形や、4)のように正方形に近いものがあった。また、5)のように斜めの長方形の概形となるものがあった。



5-1-2. 横長の長方形 — 【つ】【へ】 —

横長の長方形では【つ】【へ】を確認した。どちらも1画で書ける平仮名であることから、比較的概形は

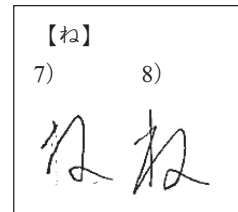
取りやすいようであった。【へ】に関しては、左側が下がりすぎてしまい、横長長方形に収まらない字形が1例見られた。



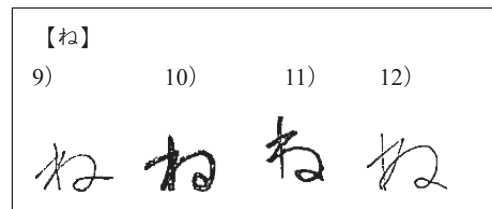
5-1-3. 正方形 — 【は】【ね】 —

【は】【ね】を取り上げた。

【は】については、正方形に収まる形で書かれていたが、【ね】は大きく7) 8) と9) ~12) の特徴に分かれた。7) 8) の場合、中央の隙間が狭くなっている。



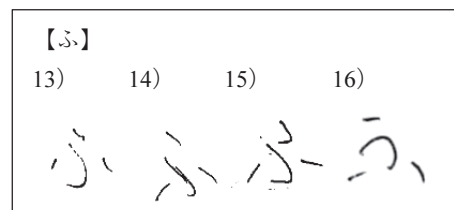
また、最後の結びが右に長く出ているため、中央の隙間の狭さが際立っている。9) ~12) については、2画目の横線の折り返しが遅くなってしまい、1画目の縦線との間に隙間ができてしまい、正方形より横長になったり、右下がりの形になったりしているパターンである。



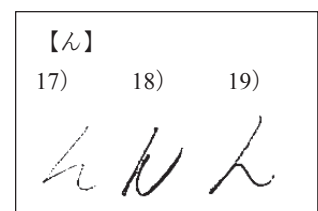
【ね】については、2画目の動きが複雑であることも字形の捉え方の難しさにつながっていると考えられる。

5-1-4. 三角形 — 【ふ】【み】【ん】 —

【ふ】については、4つの画の組み合わせが重なる部分がなく、概形を取りにくい文字である。例に挙げた文字の概形は三角形に当てはめが可能であるが、13) 14) のように3, 4画の位置が極端に上や下になっており、望ましい概形が取れていない。また2~4画の3点は同じ傾きに書くのが望ましいが、13) ~16) は3点の方向が全て異なる向きになっており、【ふ】としての筆脈も感じられにくくなっている。

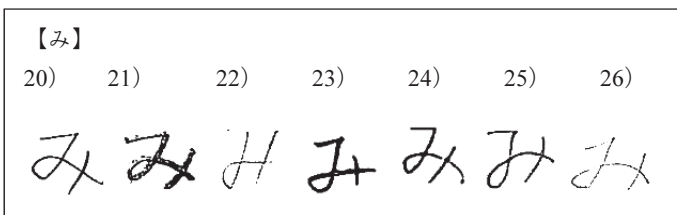


【ん】については比較的概形を取りやすいようであった。しかし、17) ~19) のように最後の弧を描く部分が三角形の底辺の中心より右寄りに十分接しておらず、傾いた三角形の概形になってしまう例も見られた。17) は1つ目の折り返しが左の斜線に接する部分がなく開いてしまっており、形が



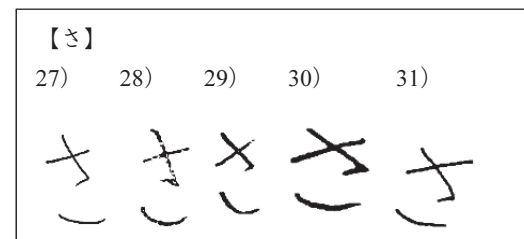
整えにくくなっている。18) 19) については、17) とは逆に 1 つ目の折り返しが左斜線に重なってしまい、「h」のように見える可能性もある。

【み】の概形については、学習者の多くが三角形を傾けた形となり、その要因は 3 パターンに分かれた。20) 21) は、最初の横画が長過ぎるため、三角形より台形に近い概形となってしまう。22) 23) は、最初の横線が折れ、左下に向かっていくが、左へ向かう程度が不十分であり、四角形に近い概形となっている。24) ~26) は、22) 23) と同様の問題点に加え、左斜め下で隙間を作りその後の線がかなり曲線になっており、「お」のように見えてしまっている。隙間を作った後に大回りしてしまう例である。



5-1-5. 逆三角形 — 【さ】【す】 —

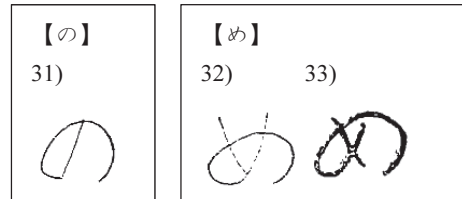
【す】については、逆三角形に入れられており、概形上の問題点はなかった。【さ】については、14 例が逆三角形ではなく、縦長長方形あるいは正方形に近い概形であった。【さ】は本来、1 画目の横線を長めに書き、逆三角形の概形をとるが、学習者の場合は 1 画目と 3 画目の幅がほぼ同じであるため、概形が 27) ~29) のように縦長長方形か、30) 31) のように正方形になってしまう。学習者が学習時に使用する日本語教科書の場合、文字指導を念頭に入っていないため、そのほとんどが明朝体やゴシック体が使用されており、「さ」「さ」のように 1 画目が長いフォントに慣れている可能性も考えられる。また、教科書体においても「さ」のように 1 画目の長さが 3 画目とほぼ同じである。文字指導の際には教科書体で文字が例示されることも多く、学習者がフォントの影響を受けていることも示唆できるのであろう。



5-1-6. 円 — 【の】【め】 —

円の概形に当てはまる【の】【め】については、比較的概形を取りやすいようであった。4-1.で触れたように、平仮名の特徴として「やわらかさ・丸み」が多く

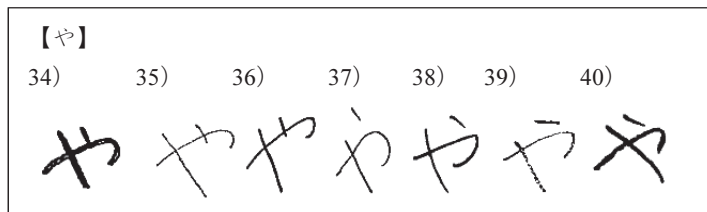
挙げられており、円の概形は「やわらかさ・丸み」を強く表しており、学習者の意識も向けやすいと考えられる。しかし、31) ~33) のように左斜め下から左上に向かう方向が十分に上を向いていないため、下に広がる円や楕円に近い概形となる例も少数見られた。また、【め】については、32) のように 1 画目が下まで出ていなかったり、33) のように 2 画目の最初が出ていなかったりと、文字を形成している点画への意識が十分とはいえない。



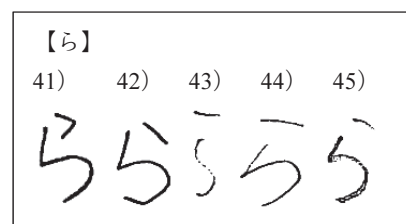
5-2. 筆脈 — 【や】【ら】 —

【や】【ら】を取り上げ、筆脈について見ていく。【や】は 16 例に筆脈が見られなかった。

【や】は、1 画目が下から回り 2 画目へとつながり、2 画目の点（あるいは短線）から 3 画目へとつながる筆脈を感じられる文字である。しかし、学習者の文字には、34) ~36) のように 2、3 画目が平行に並んでいたりと、37) ~40) のように、2 画目が 3 画目に全くつながらず、筆脈が表れていない文字が大部分を占めていた。38) ~40) は、2 画目が左への傾きが強く、筆順も 2 画目として書字しているかどうかにも疑問が残る。



【ら】は 10 例に筆脈が見られなかった。【ら】は 1 画目から 2 画目へのつながりが表れるべきであるが、学習者の場合、1 画目と 2 画目が個別の点画であるように感じ取れてしまうものが多くあった。41) 42) のように 1 画目が 2 画目に対し横に位置する場合と 43) ~45) のように真上に位置する場合に大きく分かれた。1 画目と 2 画目をそれぞれ部分的に見れば【ら】の各部分を表しているが、筆脈としてのつながりがないため、【ら】の文字として不自然に感じられてしまう。



6. まとめと今後の課題

本稿ではドイツの非漢字圏出身の日本語学習者の持つ文字に対する意識と、実際の書字による平仮名の特徴を概形と筆脈の2点から分析し考察を行った。以下ではその結果を(1)平仮名のやわらかさ・丸み、(2)概形、(3)筆脈としてまとめ、平仮名指導の改善への提案を行い、さらに課題についても述べたい。

(1) 平仮名のやわらかさ・丸みについては、アンケートの記述回答に多く書かれていたように、平仮名をやわらかさ・丸みのあるものとして捉えており、書字された平仮名についても「曲線的」な線を使用できている、やわらかさ・丸みが表れていた。【は】の1画目が直線になる等、線としては堅さが見られた例もあったが、平仮名全体として見た場合には十分に文字に表現されていた。

(2) 概形については、4-2.でアンケート結果から概形についての理解や意識の不十分さを導いたが、実際の書字された平仮名からも、概形を把握している／意識しているとは言いがたい様子がうかがえた。【つ・へ・り】等、比較的点画が少なく、交差のない文字の場合、概形はある程度維持される傾向にある。また、円の概形についても、上記(1)で触れた平仮名のやわらかさ・丸みに通じる概形であり、自然と意識できる／しやすい概形であり、実際の書字でも概形を捉えやすかったと考えられる。しかし、【ね、ふ、ん、み、さ】等、点画の複雑化、点画の交差や方向転換の増加により、概形への意識が薄れる、あるいは、概形を捉えることができないと思われる。また、【さ】の概形については、活字フォントの影響もあると思われ、書字に与えるフォントの視覚的な影響もうかがわれる。

(3) 筆脈については、4-3.で記したように、源字からの成立過程に基づく平仮名の特徴として「流動的」であることが挙げられる。点画と点画との流動性が筆脈として表れるが、今回取り上げた【や・ら】では、多くの学習者が筆脈を文字に反映できていないことが明らかになった。学習者にとって「筆脈」という用語理解は困難であると考え、今回のアンケートでは「筆脈」ではなく「筆順」として質問項目を立てた。「筆順＝筆脈」ではないが、筆順を意識して書くことで結果的に筆脈につながると考えられ、「筆順」で質問を行った。回答では「筆順が大切」とする学習者が14名に挙げられたが、筆順に沿って書字された平仮名であったとしても筆脈を捉えられない文字が多かった。学習者にとって、ひらがな特有の筆脈についての理解は十分でないとと言えるであろう。

次に、本稿での結果を基に、今後の平仮名指導の改善点を2点挙げておきたい。1点目は平仮名練習の際

の概形の導入である。単に図形を提示するだけでなく、図形のどの箇所からどの方向へ点画が流れるのかといった詳細についても同時に提示する必要があるだろう。また、フォントから受ける影響を鑑み、文字指導を行う際に使用するテキストの例字についても十分に注意を払うべきであろう。2点目は筆順だけでなく筆脈の理解の徹底である。平仮名を書字する際、筆順と筆脈の理解が十分であれば、点画のつながりが自然な平仮名となり、読み手への違和感も軽減されるであろう。

最後に今後の課題について述べる。まず、本稿での調査は非漢字圏日本語学習者の非常に限られた人数を対象としており、パイロット調査的なものに留まっている。また、平仮名の分析についても、全文字を取り上げられておらず、また、分析観点も複数が絡み合う部分も検討すべきであり、分析方法についても更に改善が必要である。この2点も含め、読み手に違和感を与えない文字書字について今後も取り組んでいきたい。

謝辞

ドイツのA大学の先生方と日本語学習者の皆さんの寛大な御協力により、データ収集が可能となり、本研究を進めることができました。ここに、深謝申し上げます。

注

- 1) 全国大学書写書道教育学会 (2009) p.72.
- 2) 中村 (1973) では、日本語学習の導入期において平仮名の指導は「最低 20 時間は必要だが、この時期の生かし方によって、結局はその数十倍の時間の成否がきまるのだから、けっしてむだな時間ではない」としており、平仮名学習に時間を割くことを重要視している。
- 3) 加納 (2011) では、初級漢字 100~300 字、中級 500~1,000 字、上級 2,000 字としている。また、『日本語能力試験対策 N1 漢字語彙』(遠藤由美子他 2013, 三修社) では、漢字 2,150 字が取り上げられている。
- 4) 加納 (2011) は、特に漢字指導においては、学習者の「使われている漢字がわかればよいという理解のニーズ」と「実際に自分で漢字が使えるようになりたいという運用のニーズ」を事前に確認すべきであると指摘している。
- 5) 中村 (2009) p.78.
- 6) 日本語学習者向けの平仮名教材で概形を取り入れている教材としては『新日本語の基礎的な練習帳』(財)海外技術者研修協会編 (1994) スリーエーネットワーク等が挙げられる。
- 7) 1 名は母語が中国語であるため、本研究の調査対象からは除いた。
- 8) 「外形」と表記する場合もある。

- 9) 上掲書 1) p.70 の図を基にまとめ直した.
- 10) 上掲書 1) p.70.

引用文献

- 浅田和泉 (2006) 「簡体字および繁体字使用者における平仮名指導方法別学習効果」『ありあけ』5, 熊本大学言語学研究室.
- 加納千恵子 (2011) 「第 1 章作る前に」関正昭・土岐哲・平高史也 (編)『漢字教材を作る』スリーエーネットワーク.
- 川上恭子 (2009) 「中上級・上級レベルの中国人留学生の筆記能力ー「平仮名」の字形を中心としてー」『そのだ論文』園田学園日本語日本文学懇話会.
- 全国大学書写書道教育学会編 (2009)『明解書写教育 (増補版)』萱原書房.
- 中村伊予子 (2009) 「平仮名習得と学習意欲の継続ータイの「選択科目」受講学生の場合ー」『日本語教育方法研究会会誌』16.
- 中村妙子 (1973) 「導入期はどうあるべきか」『日本語教育』21.